各　位

2025 年 7 月 15 日
株式会社 山と溪谷社
https://www.yamakei.co.jp/

身近な植物から珍奇植物まで！ 多種多様な植物の面白さを堪能できるボタニカル・フォトエッセイ『根も葉もある植物のはなし その多様なすがた・かたちについて』発売

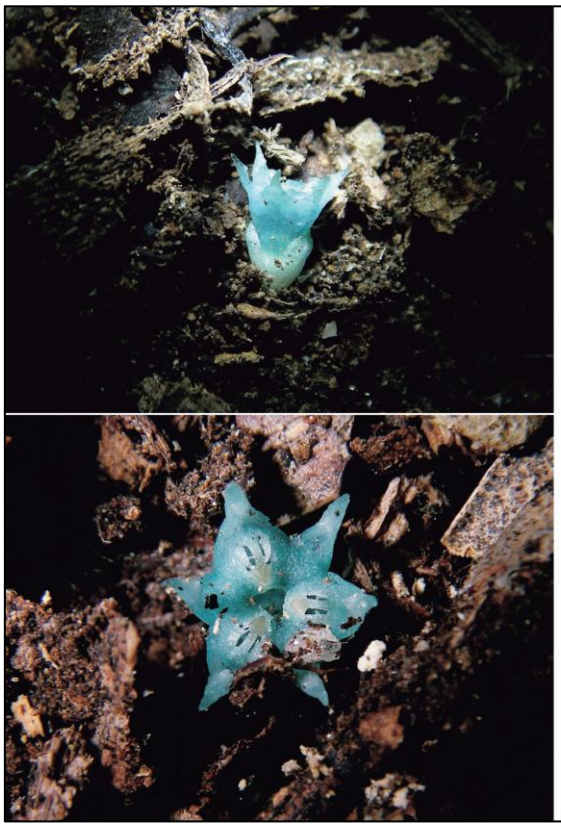
インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、『根も葉もある植物のはなし　その多様なすがた・かたちについて』（塚谷裕一／著）を刊行いたしました。

NHK ラジオ「子ども科学電話相談」回答者でおなじみの
植物学者・塚谷裕一氏、待望の最新刊！

「多種多様な植物たち。世の中には、その千差万別の楽しさに気づいていない人も多い。それどころか、いろいろな植物がぎっしりとくらす豊かな森を見ても、ただ緑一色の塊にしか見えない、という人までいる。しかしそれではあまりにもったいない」

葉の進化と形態を研究する植物学者・塚谷裕一氏（東京大学大学院教授）が、日常の中で出合った特徴的なすがたの植物を、軽妙な文章と写真で綴るボタニカル・フォトエッセイ。そのすがたの理由を推測したり、観察したり、顕微鏡で調べたり…。その先には、植物の奥深さやしたたかな生態、無駄に思えてしまう謎もあって――。皮膚科医専門誌「Visual Dermatology」（Gakken）にて、創刊号から現在まで続く人気連載を単行本化！　250 編以上の中から厳選して収録しました。植物の面白さはもちろん、植物学者ならではの観察眼も味わえる一冊です。

碧い花を咲かせる葉のない新種「碧い新種」



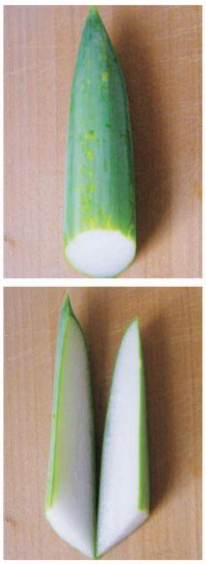
碧い新種

碧い花を2つ紹介しよう。左頁の写真は2007年10月に新種であることを確認し、翌年には正式に学名を伴った記載が済んだ植物、ヤクノヒナホシ(*Oxygyne yamashiae*)である。世界遺産の島、縄文杉で有名な屋久島の固有種だ。

ご覧の通りのごくごく小さい花で、ほかに類のないような不思議な色彩をしている。写真を見た誰もが、「これは植物ですか」と聞き返すほどである。れっきとした種子植物で、雄しべも雌しべもある。ただし緑の葉はない。

それというのも、この植物は菌寄生植物（むかしは腐生植物といった）で、根に入り込んだ菌類から栄養を奪ってくらす性質をもっているからである。それだけに、花を咲かせる時を除くと、地上に顔を出すことはまずない。本種の第一発見者は写真家の山下大明さんという方だが、よくぞ見つけてくださったというところ。報を聞いて、案内してくれた布施健吾氏に、現地で「ここ」とピンポイントで指し示された場所を

ネギの葉の表はどこに？　「中空になる」



中空になる

左頁の写真右は、最近、わりと見かけるようになってきた赤ネギ。北関東などで作られている品種である。その左にお見せしているのは、ご存じ下仁田ネギ。冬が深まってくると、これらのネギがおいしくなる。それにしてもこのネギ、いろいろと誤解がつきものだ。今回はその中で、2つばかり誤解をただしておこう。

まずネギというと、中空の筒というイメージが強いが、それはもともとの姿ではない。食用にしているのはネギの葉の部分。そのネギの葉は本来、中空ではなく、下仁田ネギの断面写真で示す通り、中が詰まっているものなのだ。それでこそ、あの甘いとろりとした食味が楽しめるわけである。あれが中空では、どんなおいしい食材とともに煮たところで、何の楽しみがあるだろう。もちろん下仁田ネギだけでなく、小ネギだろうと万能ネギだろうと、もちろん赤ネギだろうと、若い時の葉は皆、中がちゃんと詰まっている。いずれも葉が成熟するにつれ、中が中空になってゆくのである。

ミョウガの花は美しい「透き通る」

透き通る

ミョウガは私の好物の一つである。物忘れをするようになるという俗説があるが、これは真実ではない。好きなのでよく食べるが、とくに物忘れが多くなった気はしない。ただし客観評価ではないので、物忘れの度合いそのものを忘れている可能性もないわけではない。

さて、ミョウガの食用部分は花序である。赤みを帯びたオリーブ色の本体は花を抱く苞葉だ。花はこの苞葉の間から抜きん出て咲く。ただ、花が咲いてしまったら、ちょっと熟しすぎだ。まだ苞葉の間にぎっしりと蕾が詰まっているような、若いうちに収穫するのがよい。しゃきしゃきとした歯触りも香りも、その頃がいちばんよいからである。

知っている人は多いと思うがこのミョウガの花序、へんてこな場所にできる。夏の最盛期、ミョウガ畑を見に行っても、目に入るのはショウガの茎そっくりの葉と茎だ

108

■目次

第一章　葉

どっちもどっち／分泌する／ダニを飼う／捕まえる／新芽の紅／白いハンカチ／穴があく／息をする／つるりとする／尖ってへこむ／凸凹する／中空になる／きらめく／他人のそら似／葉ではわからない／痕が残る／わくらば／角が取れる／まだらをつくる／防寒着を着る

第二章　花

河津／糸を引く／移ろう／変形／変化咲き／海面下で／透き通る／輝く／極限／広がるレース／色づく／黒い花／温める／タシロ氏／世界最大に咲く／蒼に咲く／碧い新種

第三章　果実、種子

育つ／袋になる／ひび割れる／表面の縞から見分ける／遅い銀杏／すれ違い／新旧のひっつき虫／くっつく／粒々／鳥をあざむく／色づける

第四章　茎、枝、幹

頂端を欠く／へばりつく／ちりばめられる／幹に咲く／住まわせる／剥がれる／乗り出す／皮だけで生きる／垂れ下がる／張り出す

第五章　根

張り出し広がる／かごを編む／先端に抱く／突き出す／化ける

【著者プロフィール】

塚谷 裕一（つかや・ひろかず）

1964 年神奈川県生まれ。東京大学理学部卒。同大学大学院理系研究科博士課程修了。博士（理学）。岡崎国立共同研究機構・基礎生物学研究所；総合バイオサイエンスセンター助教授を経て、現在、東京大学大学院教授。専門は植物学で、葉の発生を司る遺伝子経路の解明を主テーマとしつつ、東南アジア熱帯雨林でのフィールド活動など、さまざまな角度から植物の〈生〉を研究している。植物探索と撮影、読書、エッセイ書きが趣味。2021 年、紫綬褒章受章。2023 年、南方熊楠賞を受賞。NHK ラジオ「子ども科学電話相談」回答者。著書に『カラー版 スキマの植物図鑑』『カラー版 スキマの植物の世界』『カラー版 ドリアン―果物の王』『植物の〈見かけ〉はどう決まる』（いずれも中公新書）、『漱石の白百合、三島の松』（中公文庫）、『森を食べる植物―腐生植物の知られざる世界』（岩波書店）ほか多数。

【書誌情報】

書名：根も葉もある植物のはなし　その多様なすがた・かたちについて

著者：塚谷裕一

発売日：2025 年 7 月 15 日

定価：1,980 円（本体 1,800 円＋税 10%）

判型：四六判

ページ数：256 ページ

ISBN：978-4-635-06371-5

https://www.yamakei.co.jp/products/2825063710.html

【山と溪谷社】　https://www.yamakei.co.jp/

1930 年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。
さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】　https://www.impressholdings.com/

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。
さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】
株式会社山と溪谷社　担当：小山内
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング
TEL03-6744-1900　E-mail: info@yamakei.co.jp
https://www.yamakei.co.jp/